

日本におけるテレビ番組“セサミ・ストリート”に 関する一考察

江 波 諄 子

(1973年1月11日受理)

はじめに

マスコミュニケーションが我々の生活を大きく支配している現代において、その中で最も有力なメディアのひとつであるテレビジョンは、今や時間と空間を大きく超越して、華々しく活躍している。過去20年間のテレビの歴史と発展は変化しつづける将来にむかい複雑な問題を投げかけている。殊に我々幼児教育者にとっては、かけがえのない小さな生命の発育を目前にし、問題はより身近で深刻である。氾濫する商業主義に徹した怪物に手をあましても、どうすることもできない母親達。すべてが今、新しく我々にふりかかってきたテーマで、内在する問題は巨大すぎる。

このように混沌とした時代に、アメリカが製作した幼児向け教育テレビ番組「セサミ・ストリート」は、考えてみれば良識ある者の間に当然生まれていなければならなかった番組なのかも知れない。地元アメリカでの放送に加え、さらに全く同じものを日本で放送するということは、どういうことなのであろう。

文明の進歩とともに、現代の幼児教育がかかえつつある問題のひとつの具体例として、「セサミ・ストリート」の実体とその存在意味と、テレビジョンの幼児教育への役割参加について考察してみたいと思う。

第1章 TV番組“Sesame Street”とは

“Sesame Street”は1969年の11月10日から放送が開始された、アメリカの幼児教育テレビ番組である。学齢期に達するまでの子どもを対象としたもので、殊に環境からの刺激が少なく、文化的に恵まれない家庭の子どもが、小学校へ入学する時点において、豊かな教育的環境の中で育った子どもと同じような知的レベルで出発できるように意図されたものである。番組ができるまでの経緯を、ニューヨークのCBSニュースのプロデューサー・ライターであるノーマン・モリスは、彼の最近の著書「テレビと子どもたち」(pp. 174—175)の中で、次のように説明している。

全国教育協会(NEA)の見解によると、就学前の

学習経験を得やすくする要求は非常に重要なものとなっている。3歳から5歳までの子どもが、全国ではほぼ1,200万人いる。そのうち3～4歳児の5分の4と5歳児の4分の1は、就学前にどんな学校にも行かない。たしかに連邦政府はヘッド・スタート・プロジェクト〔就学前の子どもの知力をそろえる目的の教育計画〕を通して、貧しい家庭の幼児に就学前教育を与えようと試みはした。

だがNEAはすべての子どもが4歳から公共費用で学校教育の機会を与えられるべきだと論駁した。こんな計画が実施されていたら、これらの子どものうち400万人にたいする教師と施設の推定費用だけで約30億ドル近くになる。しかもこれは、子どもを収容する教室の予算さえ含んでいないのだ。だがしばらくこの大量教育計画のための費用は問題なく捻出できるものとしよう。それでもなお4～5歳児にあまねく教育を施す計画を実現するまでには相当の時間がかかるだろう。

これらのごく幼い子どもたちに教育を行うのがそれほど重要であるのは、個人の知的発達3分の2は、正式な教育を受け始める前に行われるからである。ジョセフ・マクビッカー・ハント博士はイリノイ大学の心理学教授であり、CTW(Childven's Television Workshop)の13人の顧問の1人である。

ハント博士は言う。「子どもの発達が最も急速に行なわれ、修正に敏感なのは4～5歳までなので、早いうちに子どもを教育することは重要です。この期間に、子どもはその後の基礎になる能力を身につけます。」

こうした事情がわかってみれば、この問題に対する部分的な解決、つまり費用も少なく同時にかなり敏速な方法が求められたのは理の当然であった。テレビは期待できる1つの解決法であるように思われた。

以上のような考えのもとに、この新しい画期的な試みは、カーネギー財団(Carnegie Corporation)、公共放送協会(Corporation for Public Broadcasting)、フォード財団(The Ford Foudation)、ヘッド・スタート

計画 (Project Head Start), マーケル財団 (Markel Foundation) そしてアメリカ教育局 (the U. S. Office of Education) からの財政面での援助で, 1年以上の研究の結果実行されたのである。

内容の綿密な調査研究の末, 研究者達は次のようなことを発見した。(以下は「テレビと子どもたち」pp. 179-188を参考にした。)

1. 基本的な目標は, 象徴的表現と問題解決を最も重要なものとする。それで数を数えること, 物を教えること, 数字を見出しそれを読むこと, 文字を識別することに重点をおく。
2. テレビの素材は生き生きして, 新奇さに富み, かなりの多様性を持ち, できるだけ多く動物, ちいさな子ども, 親しみやすく包容力のあるマナーで話のできる大人を使う。
3. こどもには言葉で描写された場面を頭のなかで組み立てることが非常にむずかしい。しかし, 靴だとか動物だとか家だとか話題になっている事柄をカメラが示せば, 子どもの興味をより長く持続できる。
4. 幼い子どもらは典型的な劇漫画よりも単純な絵を一般に好む。
5. 2歳から6歳児は, 全身の注意を最高7分間までは集中することが期待できる。
6. 反復と間合いを置くことについての研究。
7. 人々がわずかな暖かさや礼儀をもてば, おたがいに親切に接しられるということを示す。

東洋は番組の内容を専門的立場から, 次のように分類している。(pp. 22-32より抜萃)

1. シンボルによる表現
 - 文字
 - 数
 - 幾何学的図形
2. 認知過程
 - 知覚的弁別…身体的知覚
 - 視覚的弁別
 - 聴覚的弁別
 - 関係概念……大きさの関係
 - 位置の関係
 - 遠近の関係
 - 数量の関係
 - 時間の関係
 - 聴覚における関係
- 分類
 - 順序づけ
 - 推理および問題解決…推理および因果関係
 - 説明や解決を考え出し, か

つそれを評価することができ
る。
探究および問題解決への態度

3. 物理的環境
 - こともとそれを取り巻く物理的世界
 - 自然環境
 - 人のつくった環境
4. 社会的環境
 - 社会的単位…自我
 - 役割
 - こどもに関心のあるような社会集団
 - および施設
 - 社会的相互作用…図の見方の相違
 - 協力
 - 正義および公平を保障するための規則

こうした内容的性格をもつ “Sesame Street” は放送が開始されて短い期間に, こども達の中に浸透し, 深く楽しまれるようになった。東洋の報告によれば, 3歳から5歳という年齢層の80%近くが, この番組をみているのではないかといっている。(p. 34)

番組スタート後にETS (教育テストサービス) が行ったこどもの能力調査によると, 「ほとんど見なかった子の能力増加率9%, 週2, 3回見た子は15%, 週4, 5回, 19%, 毎日かかさず見た子は24%」という結果が出たと報告している。(読売新聞)

番組に対する少数の否定的な意見もあるが, 多くの親や教師は, テレビが子どもの教育の質を変えつつあることに驚いているようである。確かに, CTWの代表者であるジョアン・ガンス・クーニが言うように, すべての解答が得られるまで, 手をつけないでいるというわけにはゆかないのであろう。

CTWは “Sesame Street” を1970年の夏の終りまでには, 26余国に輸出することができるだろうと, モリスは言っているが, 同時に彼は次のようにも言っている。「CTWは “Sesame Street” の吹きかえ版の輸出は決して受け入れないだろう。それぞれ異った国に住んでいる子どもたちに最高の効果をあげるためには, 文化的社会的相違に応じてまったく異った作品をつくることが望まれるからだ。」(p. 195)

第2章 日本における「セサミ・ストリート」について

米国での幼児むけテレビ番組 “Sesame Street” は1970年4月からNHK (日本放送協会) により多目的番

組として放送が開始された。テキストも発売され、平常は毎週日曜日の午後7時から8時まで、夏休みや冬休みなどの長期の休暇中は、特別なスケジュールが組まれ連日午前中は9時より、午後は1時より放送される。「番組を相当しているNHK青少年部・後藤田純生チーフディレクターの説明だと、投書や電話による反響からすると、見ている幼児は3つのタイプに大別できるそうだ。

①英語じゅくに通っているような子で、純粋に英語を勉強するために見ている、または“見せられている”子
②見ているうちに自然に英語を覚えるのではないかという希望的観測を母親が抱いているタイプ
③英語とまったく関係なく、登場人物の人形や漫画が面白くて見ている子。

しかし、テキストの売れぐあいから判断すると、視聴者の約50%は中学生、高校生、大学生、サラリーマン、主婦など合わせて20%から、30%で、英語の勉強のためにみている人がほとんど。残りの2、30%が幼児というのがNHKの推定だ。」(読売新聞)

本来、幼児向け番組として製作された「セサミ・ストリート」を日本の子ども達はどのように受けとめているのだろうか。本章では英語学習番組という要素が強い中で、日本の子ども達は番組をどのように見、どのように理解し楽しんでいるかについての調査と観察を行ってみたいと思う。

調査は埼玉県、新座市にある十文字学園女子短期大学附属幼稚園児152名を対象にその母親に対してアンケート形式が行われた。(昭和48年1月18日)その結果次のようなことがわかった。

アンケート回収率 90%

対象児数 137名

Table 1 対象児童数内訳 (名)

	4 歳	5 歳	6 歳	計
男	15	36	21	72
女	18	27	20	65
計	33	67	41	137

Table 2 「セサミ・ストリート」をみたことがあるかの問いについて

	4 歳	5 歳	6 歳	全体
はいと答えた者	70%	61%	59%	64%
いいえと答えた者	30	39	41	36

- ② 「はい」と答えた全ての子どもについて、
過去に1、2回みたことがある……55%
時々みる ……15%
継続的にみている ……30%

- ③ 「セサミ・ストリート」をみる時、テレビのスイッチをまわすのは、
こども ……54%
時にこども、時におとな……8%
こども以外の他の誰か ……38%

- ④ 「セサミ・ストリート」をみている時、こどもは、
途中でやめる ……32%
いろいろである ……12%
最後までみている……56%

※「いろいろである」というのは、途中でやめたり、最後までみていたり、又途中みない部分もあって最後までみていたりの意。

以上の調査結果からわかることは、対象となった幼稚園児の64%のこどもが、NHKの教育テレビ番組「セサミ・ストリート」を少なくとも1度以上みたことがあり、その中の30%のこども(全体では20%のこども)がかなり連続的に番組を楽しんでいるということがいえる。番組をみるこどもの約半数は、自分からテレビのチャンネルをまわし、最後まで一応みている。しかし、最初の母親に対する質問要項の③の2番目「時にこども、時におとな」と④の2番目「いろいろである」はアンケート集計後に必要に応じて加えられた項目であるため、殊に④の3番目の「最後までみている」と答えた者の中にも途中みない部分もある可能性が考えられる。

次に、子ども達は番組をどのように理解し、楽しみながらみているのだろうかという疑問を解くために、以下にあげる4人の子どもを対象に観察を行ってみた。

対象児	年齢	観察年月日	視聴された内容(「セサミ・ストリート」テキストブック)
リョウコ	1歳	昭和48年1月4日	#205
ミカ	6歳	昭和47年12月29日	#203
ユウコ	7歳	昭和47年12月31日	#140
ナツコ	10歳	昭和47年12月31日	#140

リョウコ、ミカは英語とは特に何の関係もない家庭、社会に育っている。ユウコ、ナツコは姉妹で、幼稚園が教会附属であったため、その間に少し英語に触れているが、現在は公立の小学校に在学中であり、家庭でも特に英語に触れるチャンスはない。

観察は、観察者がテレビのスイッチを入れ、番組「セサミ・ストリート」をみるように、こどもを誘導することによって始められた。放送中はこどもと一緒にテレビをみた、観察者は原則として、こどもへの働きかけはなるべくおさえ、こどもからの働きかけには、その必要によって応じた。ただしこどもがあきてテレビの前から立

ち去ろうとした時は、特別に働きかけ、ラレビをみつづけるよう促した。猶ユウコとナツコは同時に観察が行なわれた。

その結果次のようなことが明らかになった。

1. 番組の内容についての分析

番組に現われる場面は、大きく5つに分かれる。つまり、セサミ・ストリート上の場面、アニメーションの場面、指人形の場面、フィルム、その他である。以下は、全体の場面の变化した回数に対する個々の場面の現われた回数の割合である。(Table—3)

Table—3 各場面の全体に対する割合

場面	#205	#203	#103
セサミ・ストリート	30%(8/27)	28%(8/29)	41%(9/22)
アニメーション	22%(6/27)	35%(10/29)	27%(6/22)
指人形	26%(7/27)	20%(6/29)	18%(4/22)
フィルム	15%(4/27)	10%(3/29)	14%(3/22)
その他	7%(2/27)	7%(2/29)	—

()内は全体に対する各場面のあらわれた回数の割合を示す

観察された3回のテレビ番組「セサミ・ストリート」によると、番組の内容は非常に小刻みに展開され、その多くは、セサミ・ストリート上とペペット(指人形)の登場する場面と、アニメーションの場面が大部分を構成している。次に、それぞれの場面が意図してこどもに与えようとしているものは何か、制作者の教育的配慮から番組の内容を分析してみる。Table—4は全体の場面の数に対する種別教育的配慮の割合である。

Table—4 各内容別の全体に対する割合

内容	#205	#203	#104
ことばやアルファベット	44%(12/27)	24%(7/29)	27%(6/22)
数	15%(4/27)	17%(5/29)	23%(5/22)
形	—	11%(3/29)	—
フィルムによるこどもをとりまく世界	15%(4/27)	7%(2/29)	13.5%(3/22)
歌音・楽	11%(3/27)	17%(5/29)	13.5%(3/22)
その他	15%(4/27)	24%(7/29)	23%(5/22)

種別教育的配慮の項目の最後の3つ(フィルムによるこどもをとりまく世界、歌、音楽、その他)は、さらに詳しく検討すると、例えば歌の中でことばや社会的相互作用(第1章参照)を教えていたりしてより複雑な構成である。Table—2からすると、教育的配慮として、ことばやアルファベットや数を教えようと意図された場面は毎回全体の半分は十分していることがわかる。

2. 番組放送中のこどもの態度について

こども達は1時間もの長い間、一体どのような態度で番組を観ているのだろうか。以下は、観察されたこども達の番組放送中の態度についてのまとめである。

○番組に対する肯定的な態度

リョウコの態度は表面的な行動でしかとらえられない。彼女の肯定的な反応は、①だまってみつめる、②手足を動かさない、③ゆびしゃぶりをしないの3つがあり、番組の前半には以上の行動がより多くみられたが、その後も、場面が新しくかわったり、大きな声などがすると時々上記の行動をしめた。ミカ、ユウコ、ナツコの番組放送中の肯定的反応はTable—5に示す。

Table—5 番組放送中におられた肯定的反応の回数

	ミカ	ユウコ	ナツコ
番組の内容に関する反応	2回	10回	12回
内容に直接関係のない反応	10	11	5
画面から連想される反応	2	4	1

番組の内容に関する反応とは、例えば、「今、アイスクリームといった。」とか、「8とNがまた出てきた。」とか、「きかせてってっているんでしょ。」のように、外国語というひとつの壁を越えて、制作者がこどもに教えようとしているものをこどもがとらえようとした時の態度である。内容に直接関係のない反応とは、画面上にあらわれたものから例えば、「顔がピンクにみえる、わたしなんか黄色って感じ。」とか、「あんなに鼻が赤い。」とか、「あのおじさんこの国の人。」のように、番組制作者が意図しているものをこどもが直接とらえていない言動である。最後の画面から連想される反応というのは、例えば「これ何チャンネル」とか、番組の外国人をみて自分の身近にいる友達の外国生活体験を話すなどの言動である。

ミカとユウコは年齢は1歳しか違わないが、日常生活場面で両者に知的発達の差がかなりはっきりしているように感じられる。Table—3からすると、こども達は同じように興味を持って番組をみても、番組をみながら考えている事には違いがあるようである。一般に年齢が大きくなるとこどもは番組の内容を理解しようという態度をより多く示し、その理解も正しいものにより近づいてくる。反対に年齢が小さい程全体の態度の中で表面的なとらえ方をする割合が増えるようである。いつれのこどもについても語学の壁があるため、内容の完全な理解はできておらず、想像して楽しむ態度が共通にみられた。

○番組に対する否定的な態度

番組放送中のこども達の番組に対する特にめだつた否定的な言動のあらわれた時間をTable—6に示す。

Table—6 番組放送にあらわれた否定的反応の時間(分)

リョウコ—3—7—14—20—30—40—50———
 ミカ———11—17——30———44—50
 ナツコ———32———45———
 ユウコ———32———45—54—55—

*リョウコの否定的な態度の例としては、えんぴつにさわる、ゆびしゃぶりをする、よそみをする、手足の動きが多くなる、テレビから離れるなどである。ミカの否定的な言動として彼女は11分目にそれまでみていたテレビの前の席をかえ、近くのトランプにさわり、歌を歌い出した。17分目に彼女は観察者にむかって「ねえ、これが終わったらお外で遊ぼう」という。30分たつと彼女はもう一度観察者に「ねえ、お外へ出よう。」といい、それから44分までの間に、トランプにさわったり、「おねえちゃん、またなわとびしたくなっちゃった。」という。44分になると彼女はまた「ねえ、早く出ようよ。」といい、50分目にそれまでも「もう少ししたら、これが終わったら。」と答えていた観察者のそばを離れ、1人で「お外へ出よう。」といって、テレビの前を立ち去る。

ユウコとナツコは、観察者も含めて3人でみていたため番組放送中に否定的な言動はほとんどみられなかった。32分たつとユウコは大きなあくびをし、「これいつも1時間くらいやっているの。」といった。それをきいてか、ナツコは今まですわってみていた姿勢を直し、足を組みかえる動作をした。45分目にユウコには少しあきてきた感じが、身体の小さな動作が増えたことで感じられ、その頃ナツコはまた身体の位置を大きく1度かえた。54分たつと、ユウコは手足の動作がまた増えて、「今、9時40分くらいでしょう」という。この間ナツコはそのままだらでテレビを見ている。55分になって、ユウコはテーブルの上のレモンティーをのみ、「やっとレモンティーのみ終わったわ、すっぱくて。」といって茶わんをテーブルの上に置く。ユウコの姿勢は次第にくずれ、手足の動きが多くなった。ナツコにはその後大きな変化はみられなかった。

3人の子ども達はどれも1時間という長い番組のほとんどをテレビの前にすわりみていた。しかし上記の観察記録からも明らかのように、どの子どもも観察者が同席しておらず何もそこに子どもをテレビの前にすわり続けさせる reinforcer がなかったならば、もっと前の段階で番組をみることをやめているであろうと想像される。事実、ミカはこの番組を以前にほんの少しだけみたことがあると述べているしユウコとナツコも以前にみたことがあり、途中でみるのをやめたのは「つまらなくなったから。」と述べている。

しかし今回子ども達をして、ほとんど1時間近くもテレビの前にすわらせていたのは単に観察者がそばにいたからという理由だけではないと思う。子ども達は時間の

経過とともに飽きに代表される番組への否定的態度をくり返しあらわしているが、その間にも決して笑いに代表される肯定的態度を失っていないのである。番組スタート後30分を経過した後でも、プベットやアニメーション、こどもの声、などの場面になるとまた興味を持ち直すのである。しかし、それも長く続いたりしたり、会話の多いセサミストリート上の場面になると再び興味を失ってしまう。プベットやアニメーションに対する好みは、ミカとユウコとナツコにより多くみられ、1歳のリョウコは、どんな場面でも目新しいものには、いつでも少しの間興味を示すようであった。

ま と め

こどもは小学校へ入学する前に8,000時間もテレビをみているとか、たとえ親の監督をよく受けているこどもでさえ、1年に40日もテレビをみるのに費しているといわれている。モリス (p.11) は「こどもはテレビの最大の消費者ではないが、テレビはこどもの時間の最大の消費者の1つである。」という。テレビは確かに人間に役立つもするし、害も与える。しかし、いづれにせよテレビは現代の我々の生活を維持してゆくのに必須の存在である。

「セサミ・ストリート」は、我々が科学や文明の進歩と、そこにまつわりつつ生じた商業主義社会に負けないで持っていた良識のかけらであると考えられる。つまりいいかえれば、この番組は1つの意志表示であるが、良識の完全な姿ではない。これまでの研究過程から「セサミ・ストリート」は米国においても、日本においても、観迎されて視聴されていることがわかった。それと同時に米国における番組の受け入れ方や楽しみ方と、日本におけるそれとは同じでないことも明らかになった。米国では就学前の幼児教育番組であるが、日本においてその目的は次の3つであるように思う。第1は語学番組としての存在であり、第2は娯楽番組としてであり、第3は幼児教育番組としてである。番組誕生時の目的から考えると、この番組は、米国の様々な階層(殊に恵まれない階層)の幼児が楽しみながら学ぶという目的に使われた時こそ、百パーセントの効果を発揮するわけである。それゆえ日本における放送のように、分割された放送目的では、分割された効果しか期待できないのは、観察によって得られたものからも理解できる。

しかしこれまでの日本の幼児達は、氾濫する怪獣物に日夜幼い心身を溺れさせていた。最近の子ども雑誌の付録「ウルトラ怪獣全リスト」(昭47.10)によれば、205種の怪獣(星人を含む)が出されていると滑川道夫 (p.35) は報告している。そして怪獣物のテレビ番組の視聴率(註1)は10~20%を示しているといわれる。このよ

うな状態の中で、「セサミ・ストリート」の出現は、たとえそれが米国からの借り物であっても我々に明かるい希望をもたらした。「セサミ・ストリート」が輸入され、日本でも楽しまれているという事実は、我々に次の2つの点を考えさせるだろう。まず第1にそれまで商業化した子ども番組を半ばあきらめの境地で黙認していた母親達に、語学教育も含めて、テレビ利用の別天地があることを教えた。第2に借り物でない本物の日本の幼児むけ番組をつくらなければならないことを教育者に気づかせたということである。

日本の子ども達が「セサミ・ストリート」を楽しむことは肯定されてよいと思うが、それによって母親が語学教育のみのとりこにならないようにしたいものである。そうなる前に、教育者や番組制作者が新しい、我々独自の幼児教育番組を創り出さねばならない。

では、我々独自の番組の創造とはどんなものになるのだろうか。ハントの言う幼児期の知的発達的重要性や後になってからの再修正の困難さは、そのまま筆者の意見でもある。しかし、幼児期の発達で重要なのは知性だけではない。子どもは身体的にも、社会的にも、情緒的にも幼児期に偉大な発達の段階を踏む。子どもはいつの世も同じような発達過程を通して成長してゆくのであるが、大きく急速に変化しつつある社会において、我々はテレビというメディアをつかって何を彼らに与えることができるだろう。テレビは映像を通して次のことを与えることができると思う。

つまり、この世界とは一体どんなものであるのか、自然の姿、人工の姿、そして、その中で生きる人間の姿を画面に写し出し、それと幼児の毎日の生活とのかかわり合いを示すことである。具体的な内容として下記の4つのテーマを提起したい。

1. 子どもに身近な動植物の世界を物語化する。
〔目的〕…自然界と人間の世界の共通のテーマやかかわり合いに気づく。
2. 過去の生活と、そこに生きた人々の姿の紹介
〔目的〕…遠い、近い過去の人間社会を理解することによって、現在と未来は過去の歴史に支えられていることに気づく。
3. ある主人公の子どもが、事情により世界の様々な家庭や社会の生活を体験する物語
〔目的〕…異なった場所に生きる同世代の人間を理解する。

4. あらゆる個性をもったこどもの物語

〔目的〕…どんな性格も社会に大切であり、生かされることを強調する。

「セサミ・ストリート」によって考えられた。優れた技法を十分に利用することによって、広く深い人間の問題をわかりやすくこどもに提供することができた時こそテレビジョンの存在価値は高められるのではないだろうか。

おわりに

すべてと違ってよいくらい、アメリカで起った旋風に驚く程のスピードで煽られる日本を落胆の気持で眺めていた矢先、「セサミ旋風」が起った。同時に歯車の止まらない社会の変化の中で、幼児教育への関心は依然と高まる一方である。

この小研究を終えて、筆者は益々広い視野での、日本のこどもに適したテレビ番組の必要性を感じている。

研究に協力して下さった、十文字学園女子短期大学附属幼稚園の諸先生方と園児のお母様方、それに筆者とともにテレビを見、観察の機会を与えてくれた4人の子ども達にここで深く謝意を述べます。

参考文献

- ・ ノーマン・S・モリス、テレビと子どもたち、武田尚子訳、サイマル出版会、1972
- ・ 東洋、幼児教育学全集4、小学館、1971
- ・ 読売新聞、昭和46年9月9日記事「セサミ・ストリート」
- ・ 「セサミ・ストリート」テキストブック、⑧、日本放送出版協会、昭和47年12月15日
- ・ 滑川道夫、教育心理、Vol. 20, No. 12
- ・ *THE SESAME STREET BOOK OF LETTERS*, A Preschool Press book distributed in association with TIME-LIFE BOOKS, Little Brown & Co., and General Learning Corporation, 1970, New York.
- ・ *THE SESAME STREET BOOK OF NUMBERS*, "
- ・ *THE SESAME STREET BOOK OF SHAPES*, "
- ・ *THE SESAME STREET BOOK OF PUZZLES*, "

註1：視聴率の数字とは、平均15分間に特定のテレビ番組を見る世帯や子どもやその他の測定対象となるグループが、全体の世帯や子どもやその他のグループにしめる百分率である。言いかえれば、視聴率の数字が表わしているものは動員し得るテレビ視聴者総数中、特定の番組を見ている観客のパーセンテージである。ある番組が視聴率として2.5を受けとるなら、それは、その番組が放映中の平均15分間において、潜在視聴者総数の2.5%が番組を見たという意味である。(モリス pp.132-133)

A Study on T. V. Program "Sesame Street" in Japan

Junco Enami

Jumonji Women's College

Saitama, Japan

Abstract

It has passed more than three years since the T. V. program "Sesame Street" has been brought to the American youngsters. Six months later, Japanese adopted the program to themselves without any modification. The program is getting more attention in the Japanese society as well as in the United States. At the same time, there remain lots of confusion in the field of early childhood education. Many Japanese mothers have been worried by the enormous number of violent, commercialized T. V. programs for children.

The study was attempted to search the following two items.

1. Understanding of the content of "Sesame Street"
2. Attitude of Japanese children toward "Sesame Street"

As the result, 64 per cent of the total children (A total of 137 children comprised the kindergarden attached to Jumonji Women's College.) have seen the program. Twenty per cent of the total children have continued to watch it and 36 per cent enjoy the program until the end when they watch. Also, the program is used in three ways in Japan, first as an English learning program; second, as an amusing program; third, as an educational program for young children. It was found, generally, Japanese young children enjoy the program. They enjoy animations and puppets especially. Their understandings are not often related to the content which the producers intend to teach them. They do not enjoy the spots with many conversations. With the increased age, children try to understand the content more.

From the findings, it is concluded "Sesame Street" was welcomed by many Japanese people, but the program is not used so effectively because of the multiple purposes. Therefore, the writer felt the necessity for making T. V. program which is suitable only for Japanese children.